

第14回 日文研フォーラム



# 近代日本文学研究の問題点

Problems in the Study of Modern Japanese Literature



キム・レーホ  
Kim Rekho

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛





● テーマ ●

# 近代日本文学研究の問題点

Problems in the Study of Modern Japanese Literature

● 発表者 ●

キム・レーホ

Kim Rekho



## 発表者紹介

キム・レーホ  
Kim Rekho

ロシア科学アカデミー世界文学研究所教授

- 1928年 北朝鮮咸興生まれ  
1952年 ロストフ大学卒業  
1959年 モスクワ大学大学院修了  
1974年 文学博士（ソ連科学アカデミー世界文学研究所）  
1989年 法政大学客員教授  
1991年～2年 国際日本文化研究センター客員教授  
現 職：ロシア科学アカデミー世界文学研究所教授  
専 攻：日本文学・比較文学

### （著書）

- |                 |              |              |
|-----------------|--------------|--------------|
| ○ゴーリキーと日本文学     | モスクワ・ナウカ社    | 1967年        |
| 現代日本小説          | モスクワ・ナウカ社    | 1977年        |
| ロシア文学と日本文学      | モスクワ・文芸図書出版社 | 1887年        |
| ヒロシマの警鐘、        |              |              |
| 現代日本文学における平和と戦争 | モスクワ・知識社     | 1989年        |
|                 |              | （日本語訳 1991年） |

### （翻訳）

- |                    |              |       |
|--------------------|--------------|-------|
| ○遠藤周作              |              |       |
| わたしが棄てた女           | モスクワ・プログレス社  | 1965年 |
| （編集）               |              |       |
| ○日本短編小説集 1960-1970 | モスクワ・プログレス社  | 1972年 |
| 日本中編小説集            | モスクワ・プログレス社  | 1976年 |
| 現代日本小説集 1945-1978  | モスクワ・文芸図書出版社 | 1980年 |
| 宮本百合子集             | モスクワ・文芸図書出版社 | 1982年 |
| ヒロシマ作品集            | モスクワ・文芸図書出版社 | 1985年 |

今日の私のテーマは、『近代日本文学研究の問題点』とつけましたが、今考えると、私にとっては大袈裟な、そして大変むずかしい問題を選んでしまったのではないかと思っております。

「問題」という場合には、まず日本とソ連の文学研究者たちの研究の成果を総括して、その上で意見の相違、対立をめぐって議論し、一定の結論を導きだす、という意味が含まれていると思います。しかし、今日は、そういう「問題」を提起するよりも、私たちソ連の日本文学研究者たちが直面している難問題についてここで話をすることによって、私の先達である日本の文学研究者たちと意見を交換したいと、そういう気持ちで私はこのフォーラムにまいりました。

日文研フォーラムの目的、主旨を読みましたが、そこには、長年にわたる研究の成果の発表もちろん大事なことではあるが、お茶を飲みながらの議論や、情報交換なども大事にしなければならない、ということが書かれてありました。そういう気持ちで私は話を進めていきたいと思えます。

日本の近代文学は、二葉亭四迷の『浮雲』が発表された一八八七年から数えると、百年以上の歴史をもっておりますが、その百年の日本文学の体験は、東洋諸国の近代文学を考える場合において、意義の深いものであると思えます。それと

同時に、世界文学の発展のプロセスを考える場合に、近代日本文学が占める位置の問題も浮かび上がってきます。類型学的な見地からみると、近代日本文学はどういう型の文学であるか。そして、作家論とか、作品論にいたるまで、いろいろな問題が提起されると思いますが、私は、ここで三つの問題を提起したいと思っております。

まず、世界の中の日本文学、二〇世紀の世界文学における日本文学の位置。そして「日本小説の時代」は到来したのか。「日本小説の時代」が到来したという論文を私は読んだ記憶がありますが、もし世界文学における日本小説の時代が到来したとすれば、それはどういう型の小説であるかという問題。

二番目の問題は、二〇世紀日本文学の中心を流れている太い線、つまり主流というものは何であるか。日本の二〇世紀文学は何を求めて流れていったか。その主な傾向はどういうものであり、日本の近代文学、そして戦後文学をもっともよく代表する作家とはどういう作家だろうか。私は、ソ連でしばしば日本の文化についての講演をしておりますが、こういう質問をよく受けております。

第三番目の問題は、二葉亭四迷の『浮雲』が近代日本文学の始まりということ、今や定説になっておりますが、この『浮雲』の主人公の性格についての問題

になると、意見はそんなには一致していないように思えます。日本のいろいろな研究論文や、文学辞典をみると、二葉亭四迷の『浮雲』は、ツルゲーネフの小説『ルージン』とかゴンチャロフの小説などから影響を受け、オブローモブと文三は「異母兄弟」であり、文三は日本近代文学における、初めての余計者の形象であると書かれています。果たして文三は余計者であるのでしょうか。

こういう問題の解明は、私にはちょっと過重な荷であるとは思いますが、問題を解決することは言うまでもなく大事なことです。それに劣らず重要なのは、問題の正しい提起でもあると思っています。

第一の問題は、日本文学が二〇世紀の世界文学に占めている位置。これは非常に広い問題と思いますが、この問題を提起したことには、ひとつの動機があります。と言うのは、二、三年前に、ソ連の作家同盟の文芸評論分科で討論会がありました。その討論会のメイン・テーマは『現代世界文学発展過程におけるアジア、ラテン・アメリカ文学の役割』でした。今、ソ連ではラテン・アメリカの文学がさかんに翻訳されていて、研究者もかなりありますので、この討論会ではラテン・アメリカの研究者たちが活発に発言し、結論としては、現代の世界文学のプロセスにおいては、ラテン・アメリカの文学が、なかでも有名な『百年の孤独』

を書いたマルケスの文学が、もっとも注目には値するのではないかという意見でした。そのあとに日本文学のことについて論議されました。

日本文学について語る場合に、多くの人たちは、まず伝統的な日本文学、『万葉集』から『源氏物語』、芭蕉の詩、つまり古典文学を念頭に置きます。日本の古典文学は世界の文化財となっており、その世界的な位置は認められておりますが、現代の、二〇世紀の日本文学の位置ということになりますと、研究は積極的ではないと思います。日本について話が起る場合には、おおむねいつも日本の経済ブームについて、文学・文化の問題と同時に話されます。が、その日本の経済的ブームのひとつの要因としても、やはり、日本人の伝統的な人間関係そして儒教的な教養、責任感とか、そういうことを西洋の人たちは、もっとも重要な要因のひとつとみているのではないのでしょうか。日本の文学においても、古典文学は認めておりますが、近代文学、なかでも現代文学においてはそのように強い関心は払われてはいないように感じられます。

だが、百年の歴史をもっている近代の日本文学が、世界文学においてどのような位置を占めているか、そして現代日本の小説というものは一体どういうものであるかということを検討することは、今日の比較文学史の重要な課題であると思

います。

確かに今世紀の初めまでは、日本文学は、西洋において（西洋と呼ぶ場合に私はロシアを含めて言っておりますが）、辺境の文学と認識されておりました。徳富蘆花の小説『不如帰』がフランス語からロシア語に翻訳されて、今世紀の初めに広く読まれましたが、これも日本の封建社会、遠い日本で起きた、ひとつのエキゾティックな家庭事件として読まれたのであって、文学作品としては評価されなかったと思っております。

日本文学を再発見し、再認識したのは戦後六〇年代から始まっているのではないかと思っております。六〇年頃から、日本文学の翻訳が、量的にも質的にも高まり、多くなっております、そして日本文学の研究者もかなり増えていきました。そして日本の文学をもっと総括的に、全体的に把握しようという傾向が強くなりました、さまざまな潮流に属する作家たちの作品を集めた「日本短編小説集」、「中編小説集」もさかんに編集・出版されるようになりました。そして今では、三〇巻をなす「日本文学全集」が出版され始めました。東洋文学研究所では二巻からなる「日本文学史」を計画しています。これはかなり大きい本になります。第一巻は明治維新まで、第二巻は明治以後から今日までの文学です。今までも「日本文学史」

は書かれておりましたが、それは体系的な文学史というよりも文学史概論といったらいでしょうか。だから今、私たちはアカデミックな文学史を編纂しようと思っけています。だが、体系的な日本の文学史を書こうとすると、今まで感じられなかったいろいろな方法的な問題が提起されてきています。

一九六九年に著名な評論家、佐伯彰一氏が、『日本小説の時代』という論文を発表しました。私はモスクワで非常に興味深く読みましたが、彼は、もしも一九世紀がロシア小説の時代であり、それが二〇世紀の初めにおいてアメリカ小説と交代されたとしたならば、今、つまり六〇年代末、七〇年代初めにおいて、日本小説の時代が到来しつつあると言っております。この場合、佐伯彰一氏は古典文学、つまり『万葉集』とか『源氏物語』とか、芭蕉のそれを言っているのではなく、近代文学・現代文学の世界的な位置ということを主張しているわけです。

これと関連して、私が最近読んだ論文で、ひとつ記憶に残るものに野口米次郎が書いた、『世界における日本文学の地位』という論文があります。これは一九三二年に書かれたので、その時代の制約性もあるということは十分に考えられますが、野口米次郎はアメリカに長く住み、その外国生活の体験を踏まえて、問題の提起をしているのです。野口米次郎氏は次のように言っております。



「日本文学は、世界意識から批判して、価値があるであろうか。日本内地において価値がある如くに、ロンドンやパリへもっていても等価値を主張しうるであろうか。これぐらい日本人にとって大問題はあるまい。・・・（中略）・・・はたして今日の日本文学に、世界的価値があるであろうか。また、過去の日本文学に今日の外国人を感服させることができるものがあるであろうか。私の結論は簡単である。過去の日本文学に世界的価値のあるものが多いというのが、私の結論である。」

この論文が書かれたのは一九三二年ですから、近代日本文学はまだ五〇年ぐらゐの短い歴史であります。世界文学における近代日本文学の価値を云々するには時期尚早だったのです。野口米次郎の関心は、日本の作家が世界文学に寄与するために必要な条件とは何か、にありました。彼は続けてこう書いています。

「私ども日本人が、文芸上に世界的価値を要求する場合には、日本人特有のものを提供しなければ駄目である。言い換えれば、中国とか西洋の影響以前の日本文学の産物、少なくともその影響の薄いもので世界的価値を争わなければならない。」

野口米次郎氏は、神道に基づく日本の伝説、仮にヤマトタケルノミコトとか、『古事記』、『万葉集』を世界的な古典とみて、平安時代の文学も、過小評価してい

ます。彼はまた、西洋文化の中心には理知というものがあって、西洋文学はその理知の奴隷となっており、日本文学には自然に対する日本人特有の態度、日本人本来の情緒というものがある。それを維持することこそ、日本文学が世界文学につながる、もっとも根本的な要因であると結論しています。

だが、ここにひとつの矛盾があるのではないかと私は思います。野口米次郎氏は、イギリスの有名なロマン派の詩人ワーズワースの汎神論に基づく詩を高く評価しながら、東洋人的な詩人が西洋に現れてきた、それを私は喜ぶと言っています。彼は矛盾したことを言っているように感じられます。日本の文学の世界性という場合には、日本人はあくまでも日本の本来の情緒というものがあるから、理知的なこと、分析的なことはやめて、本来の日本文学の伝統、その道だけに従って進むべきだと主張しながら、ワーズワースが、東洋の汎神論的な自然観を基にして浪漫的な詩を書いたことを彼は喜んでゐる。それによってワーズワースは、ヨーロッパの浪漫主義の文学に大きい貢献をしたし、世界的な詩人になったと言っています。確かにここにはひとつの論理的矛盾があるのではないのでしょうか。

ここで私は、一八世紀のドイツの有名なゲーテがいったことを思い出します。

「すべてのものは東西が両立して、融合していいのではないか」。ロシアに広く知られている諺に「棒には二つの端がある」というのがあります。二つの端がひとつの棒を形成しているのであって、その端は相通じていて、一方で呼べば、他方のところで応じてくる。東西文学を考える場合に、この諺の教訓も大事だと思います。

今まで私たちが、東洋文学の固有なものであったと思っていたものが、西洋の作家たちの作品とか創作方法を調べてみると、何と共通点が多いことでしょう。

日本に広く知られているチェーホフの文学と日本の伝統的な視角、描写法の間には、明らかな類似点があると思います。日本の短編小説には「おち」（落ち）が重要視されていない。日本文学において、日常生活は自然な流れである。自然を自然のままに書いて、クライマックスを故意に作るべきではないのだ。チェーホフの作品を読むと、同じことが感じられます。チェーホフの作品をモーパッサンの作品とよく比較しますが、チェーホフの短編『アガフィーア』を、モーパッサンの『贗の首飾り』という有名な小説と比べてみると、チェーホフの手法がどれ程、東洋の伝統的な美学に近いかということが、つくづく感じられます。

ご存知のように、モーパッサンの『贗の首飾り』は、夜会に招かれたひとりの

貧しい女性の話です。彼女は何も飾りものがないので、友人の首飾りを貸してもらって楽しい夕べをすごしましたが、家に帰って気がつくとき、大事な首飾りが無い。どうしたらいいだろう。彼女は、何年もの多くの困苦欠乏に耐えて、金をこしらえ、その首飾りと同じような首飾りを宝石店で買って、友人のところを持っていきます。友人はびっくりして、「なぜあなたは、こんなに痩せて歳をとったのだろう」と聞きます。彼女はそのとき初めて真実を話す。「あなたの首飾りを失って、その金を稼ぐためにこんなに苦労した」のだと。友人は驚きながら、「それは贗の首飾りなんだ」と言います。これが落ちというものでしょう。クライマックスというものです。結末の意外性に読者はあっと驚く。モーパッサンの物語はこの効果をねらっています。しかし、チェーホフは小説に落ちを作りません。日々の平凡な流れを好んで語るのです。

チェーホフの小説には、また心理描写においても空白があります。谷崎潤一郎の『細雪』の女主人公妙子は、愛人が死んだとき、とくに何も言っていません。彼女の心理描写が欠けていると一部のヨーロッパ評論家たちは不満でした。チェーホフも同じことです。長々と心理描写をしません。チェーホフに『持参金』という小説があります。ロシアの将校の住まいの隣に、ひとりの婦人と彼女の娘が住

んでいました。もう少し金をこしらえて持参金を娘のためにつくられたらということが、彼女の最大の望みでした。将校が二、三年の出張から帰ってきてすぐ、隣の家を訪ねると、その母親が黒い着物を着て座っている。彼は、娘が死んだということがすぐにわかった。だが、このシーンにおいて、「その娘死んだ」とも書いてないし、母親の悲しい気持ちについての描写なども一言もない。彼女が住んでいる家の中の雰囲気描写が一行あるだけなのです。「彼女は黒ずくめの服装をしていた。」それだけで終わっています。このように、チェーホフの心理描写には空白があります。

チェーホフの心理描写、もっと正確に言えば、その「空白」は、日本の伝統的な文学の手法に近いと思います。このような心理描写は、当時のロシアの作家や文学者たちにとっては新しいものであったし、何かよく理解できないものであったのです。しかし、クルジンスキーという作家でもあり、評論家である人が、チェーホフの創作方法の素晴らしさについて次のようにいっています。「物乞いをしている乞食の女性、彼女の貧しさを表現するには、何もたくさんの言葉を使う必要はない。ただ一言、『彼女は半袖のみすぼらしい、色の褪せたマントを着ていた』だけで良い。これはチェーホフが私たちに開いてくれた、新しい創作方法である」。

だが、日本文学においては、これは何の新しさもない。落ちがないということも、そして心理描写に空白があるということも、それは日本の古典文学から引き続いて流れてきた伝統であって、日本文学においては新しくはない。だから、トルストイとかドストエフスキーが日本で紹介されたときには、日本人は、新しい思想の伝道者として迎えました。チェーホフはそうではありませんでした。チェーホフのような作家は、日本の過去の文学にもあったのです。それで菊地寛は、チェーホフと井原西鶴を比較しています。しかしながら、チェーホフは日本の古典文学を読んだり、日本の古典文学の影響を受けたという証拠はひとつもありません。チェーホフの人間、人格その中に、そしてチェーホフの文学の考え方の中に、東洋的な要素があったのです。それを發揮することによって、彼は自分の文学を豊かにしたと思われます。そういう可能性を私は東洋の文学においても探し出すことができます。近代、すなわち「西洋的」な思维方法を、有機的に創作方法に取り入れている日本の作家は少なくありません。そして、その創作方法の可能性を否定することはできないと思います。いま日本の国際化が盛んに叫ばれておりますが、それは文化の領域においては、伝統的文芸を保存しつつ、なお古い枠を越えて、全人類的な価値を志向することによって成し得るのではないで

しょうか。それが、現代日本文学の大きな課題の一つのように思われます。

今世紀の初めにトーマス・シュルチエールという人が、アメリカでロシア短編集を編集しました。プーシキンから始まってクプリンまでの六〇年間のロシアの短編集です。編集のあとがきに彼はこう書いています。「プーシキンといいますが、それはロシア文学の創始者であり、ロシアの詩聖であり、ロシアの作家は皆、プーシキンから出たものだ。ロシア文学を世界的な水準に上げ、近代ロシア文学の創始者となった。」そのプーシキンのことではありますが、この短編集には、プーシキンの有名な小説『スペードの女王』、ゴーゴリの『外套』が入っております。トーマス・シュルチエールは、あとがきにつづけてこう書いております。「私たちは、『スペードの女王』を読むと、非常に面白いと思うが、はたしてこれはロシア小説かと自問する。いや、これはロシア小説ではない。アメリカの雑誌にジョン・ブラウンの名で掲載されてあっても差し支えないという答えが出るだろう。ところが、ゴーゴリの『外套』については、これこそ紛れもなく真のロシア小説だ。これはジョンとかスミスとかいう名で通そうとしても、ごまかしがきかない」。実に面白い話です。

「ゴーゴリがロシア的であって、プーシキンがロシア的でなくヨーロッパ的で

ある」とはどういうことを意味しているのでしょうか。日本文学でも同じことがいえるでしょう。現代文学の例でいいますと、「川端康成がもっとも日本的であつて、安部公房は日本の作家ではないような感じだ」と、フランスの評論家もいっております。『砂の女』を書いた作家がフランス人であっても、不思議ではないというのです。

ゴーゴリの『外套』は、ロシアの特異な社会的情況を体験せずには書けなかつたでしょう。強い民族的特質をもちながら、世界文学へとつながっています。一方、プーシキンの場合は、「物欲によって歪められた人間性」という、全人類に共通なテーマを近代的な手法で書いている。この小説は、簡潔な文体と奇抜な構想、高い芸術的な完成度の故にロシア小説のひとつの粹となつておりますが、今世紀の初め、外国人読者は、「これがはたしてロシアの小説か」と疑つた程です。しかし今、世界の評論で、誰がプーシキンのこの小説がロシアの小説ではないと否定するのでしょうか。

そして、チャイコフスキーのオペラ『スペードの女王』がロシアのオペラではないという人は、今では誰もいないでしょう。私はロシア文化を例に挙げて説明しましたが、東洋文学の世界文学に対する貢献という問題を考える場合に、これ



は充分考慮に入れておく必要があると思うのです。

私は今世紀の初めのころについて、また、三〇年代の野口米次郎の評論についていいましたが、今の日本の評論をみると、やはり同じことが感じられます。佐伯彰一氏は『日本小説の時代』において、トルストイの『戦争と平和』を非常に高く評価しながら、日本人はこういう小説は書けないのだ。日本の文学の根本には叙情というものがあって、むしろ随筆という、構成のない作品が日本人には向いているのだ。だから『戦争と平和』のような構成のしっかりした、長編叙事詩的な文学作品は、日本には生まれまいだろう。日本の作家は、叙事詩的な作品をもって世界文学において大きな地位を占めることはできないのだろうと言っておりますが、私は疑問を抱きます。

戦後日本における全体小説論は、近代文学の流れにおいて、ひとつの大きい模索であったと考えます。そういう貴重な戦後日本文学の体験を無視することはできないと思います。

今、有名なインドの詩人タゴールの言葉を思い出します。タゴールは日本に何度も来ていますし、日本文学の特殊性を、非常に高く評価しています。同時に彼は、文学がせまい民族的な枠内にとどまる時、文学は衰退するといっています。

一九一三年に出版され、彼がノーベル賞を受賞する対象となった『キタンザリー』という創作集に彼はこう書いています。「人類の偉大な達成のすべては、私のものである。東洋精神を西洋精神から分離しようとする試みは、自殺と同じである」。このタゴールの言葉は、日本文学、広くいって東洋文学と世界文学のつながりを考える場合において、非常に示唆に富む言葉ではないかと思っております。

二つ目のテーマは、二〇世紀日本文学の主流ということでありますが、この問題を提起するにも私には、ひとつの動機があるということをお話しなければなりません。世界文学研究所が今執筆している九巻からなる『世界文学史』と、東洋研究所が準備している二巻からなる『日本文学史』の執筆にあたって、近代日本文学の理念が問題になりました。この問題の解明なしに日本の文学史を書くこと、それは単なる事件の平面的な羅列に終わります。このことは執筆者の全てが充分自覚していることですが、論争はまだ必ずしも核心に触れているとはいえない状況です。

一九六七年、ノーベル文学賞は川端康成に授与されました。ノーベル文学賞の審査委員会は、「川端康成は日本のどの作家よりも日本人の思考を代表している」

と高い評価をしています。しかし実際、川端康成の芸術が優れているのは、彼の作品が「現代日本人の思惟方法をもっとも正確に表現しているから」なのでしょ  
うか。ソ連でも川端康成の作品はずいぶん翻訳されました。多くのソ連の文学者  
は、ほぼ一致して川端康成の芸術的思考を禅仏教の自然観と美学観に結びつけて  
います。だが、六八年に書いた『川端文学の美しき矛盾』という論文において、  
アメリカの著名な日本学者サイデンステッカー氏は、次のように書いています。

「日本の伝統の中核は叙情であり、現代小説の中核はドラマ、即ち個性の発展と  
相剋である。川端において初めてこのふたつが完璧な融合を遂げ、伝統的なもの  
が現代的なものの中で、新しい生命を与えられたのであり、これは真に驚くべき、  
不思議な融合といわなければならない。」

伝統と現代文学の要素の融合と総合、これこそ日本近代文学の最大の課題であっ  
たと思いますが、近代日本文学のこのもっとも根本的な課題が、川端文学におい  
て初めて実現されたというサイデンステッカーの意見は、検討を要すると思いま  
す。

六五年にソ連の文芸雑誌『文学諸問題』が、日本の作家・評論家たちにインタ  
ビューしました。そのインタビューに答えながら、阿部知二氏はこういっており



題としてここに提起したいと思ひます。

日本近代文学の主流という場合、私小説の問題がありますが、一部のソ連の文芸評論家も、「私小説こそ日本文学の特徴的なものであり、日本文学の将来は私小説にかかっている」と主張します。これもまた検討を要する問題と思ひます。

近代日本文学と禅仏教のつながりは、私達の興味を引いています。宗教と文学を、私たちは今まで真剣に考えませんでした。宗教に対して私たちには偏見がありました。トルストイの文学においても、『戦争と平和』や、『アンナ・カレーニナ』を批判的リアリズムの傑作として、反映論的な立場から高く評価しましたが、その半面、『復活』そして晩年の宗教哲学的探究の著作を、過小評価したことを反省しております。

日本の文学についていいますと、遠藤周作の『海と毒薬』が翻訳されましたが、彼の一連のカトリックの小説は翻訳されていません。そして、志賀直哉の小説も翻訳されておりますが、彼の『暗夜行路』は、まだ翻訳されていません。『暗夜行路』を読みますと、志賀直哉が、白樺派の社会的な問題から、禅仏教的な自然観、宇宙観に移ってゆくプロセスがわかってきます。現代日本文学における禅仏教の役割は、ソ連の日本文学者たちの大きな研究課題として残っています。

安部公房の文学には、確かに禅仏教とは相反する自然観があるように思われま  
す。禅と切れたところから彼の文学は始まっているようです。『砂の女』はロシア  
語に翻訳されて、広く読まれました。読者の注意を引くのはまず主人公、仁木順  
平の自然に対する態度です。彼は自然を静観することをしない。自然は彼にとつ  
て実験の場であります。砂の物理的要素を利用して水を得る器具を作ることが自  
己救出の道と決め、それに専念します。彼の自然観は、禅仏教とはぜんぜん違  
う立場にあると思います。現代日本文学の中心に禅仏教的な自然観を置く人もあ  
りますが、その場合、安部公房の文学をどこに位置づけたらいいのか。近代日本文  
学の外に位置づけるのか、という問題も見逃すことができません。

最後に、『浮雲』の主人公、文三は「余計者」であるか、について考えてみます。  
岩波書店の雑誌『文学』が、「外国における日本文学の研究」という特集を出しま  
したが、そこに私はこの問題について文章を発表したことがあります。そのあと、  
ひとりの日本の学者から手紙をもらいました。彼は、私の意見とは反対に、文三  
は、日本における最初の余計者の形象であり、ツルゲーネフのルージン、ゴンチャ  
ロフのオブローモフとは異母兄弟であると主張します。私は、『浮雲』の主人公、  
文三を余計者という根拠はどこにもないのではないかと考えています。むしろ、

彼はドストエフスキーとか、ゴーゴリが描いた、平凡な「小さな人間」の運命というテーマにつながっているのではないかと思うのです。

文三が余計者であるとするならば、余計者のいかなる典型的特徴をもっているか、ということから論議をしなければならぬと思います。余計者という文学的用語がロシア評論において発生しましたから、ロシア文学に例をとってみます。

余計者という場合に、誰に対して、どういう社会関係において彼は余計者であるかということをも、まず究明しなければならぬ。ロシア文学における余計者は、主として貴族、或いは地主階級に属する若者たちでありました。彼等は高い教養を身につけており、その知的水準は周囲の人々をはるかに越えています。その社会に彼等は迎えられません。彼等の高い知性が、農奴制の社会環境と摩擦を起こしているからです。だから、この反体制的な思想家達は高慢な理想について雄弁をふるまうものの、理論を実践に移そうとすると何もできない。だから、あるものは自暴自棄となり、あるものはルージンのようにロシアという国の社会環境から脱出してフランスへ行き、一八四八年の革命に参加して、パリのバリケードの上で勇敢に死んでいく。こういう型の主人公を、ロシアの文学においては余計者のタイプといっております。

文三はルージンに近いタイプでしょうか。文三の父は侍でありましたが、明治維新のあと零落します。彼は東京に出て、おじさんのところで寄宿し、居候の屈辱感を身をもって味わいながら、なんとか勉強をして小官吏になります。彼のもっとも大きい希望は何かというと、万事節約に節約して、金をあつめて小さな家を買い、田舎からお母さんを連れてきて一緒に住んで親孝行をしたいことです。平凡な人間の平凡な望みであります。彼の人生の目標には、儒教的な要素が多分に残っています。ルージンは非凡で、周囲の目からみると天才的な人間で、高邁な理想を持ち、それを雄弁に物語る。文三にはそういう面が少しもありません。彼は内向的で黙っていて、自分の意見を率直に話しもしません。二葉亭四迷は、文三について、彼は他人を叱るというよりも、黙っている方が似合う、そういう生き方の主人公であると言っております。ロシアの文学における余計者の特徴的な性格は、文三の形象には与えられていないように思われます。

二葉亭四迷は、『浮雲』において、余計者の形象を創作するということよりも、むしろ小さな人間、平凡な人間が、近代化されていく明治社会において味わう幻滅の悲哀を物語っているように思います。彼は一生懸命幸福になろうとしている、貧困から抜け出そうとしている、同時に、彼は全力を尽くして、人間的尊厳を維



持しようとしていてそれができない。ここに葛藤があり、ここにドラマが起こってくる。この近代的ドラマを創作するにあたって、二葉亭四迷はドストエフスキの小説に目を向けたのです。これは作家自身が言っていることであります。

作品の結末に、文三は半信半疑で「どうしたものだろう？」と自分に問うています。主人公の生涯のもっとも危機的な瞬間に、この問いが彼の心をかき乱すのです。「どうしたものだろう？」この問いこそ近代日本文学の精神的探究の出発点のひとつではないかと思われれます。

\*\*\*発表を終えて\*\*\*

京都で日本文学を語る — 外国人日本研究者には忘れられない出来事である。

歴史の古い京都の寺社をおとずれ、町家が並ぶ京の街を歩きながら時のながれを想う。近代日本の精神文化が古典につながっていく。そしてこの忘れがたい千年の都で、今まで著書を通して名前を知り尊敬してやまなかった日本の先達と日本文学のよみ方を語り意見を交す。

すばらしい話の場をつくって下さいました日文研の皆さまに心からお礼を申し上げます。お元気で今後もいい仕事を山ほどなさって下さい。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
25	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
38	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
39	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
41	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McARTHRY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・ カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
----	-------------------	---

○は報告書既刊



発行日 1992年10月5日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*

©1992 国際日本文化研究センター





■ 日時

1989年8月8日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

